

産別民同がめざしたもの (2)

——三戸信人氏に聞く



- 1 労働運動への参加
- 2 戦時下の左翼前歴者（以上第489号）
- 3 日本労働運動の再出発（本号）
- 4 産別民同の結成
- 5 産別民同と新産別

3 日本労働運動の再出発

新民主主義同盟の結成

——三戸さんが産別会議の書記として本部に入られたのは1947年の年明け、2・1ストのころです。やや遅れての“戦列復帰”だったのですね。

三戸 産別会議の書記となったのは2・1スト直後のことです。しかし、私は終戦時から新民主主義同盟を結成して労働運動の再建に取り組み、傍観していたわけではないのです。私は終戦の翌日に理研（理化学研究所）を辞め、東京・南部の工場地帯を回って労働組合の結成をオルグしておりました。産別民同のことについて話す前に、新民主主義同盟のことについて少し述べます。

終戦翌月の昭和20年9月早々、私たちは、日本という国家を民主主義で平和的に再建したいという目的で新民主主義同盟という団体をつくりました。

この新民主主義同盟という名称は、毛沢東の

新民主主義論から採ったものです。第2次世界大戦中、中国では毛沢東が新民主主義の思想を打ち出しました。これは孫文の民主・民生・民族の三民主義に社会主義的な要素を加えたもので、それにアメリカのヘンリー・ウォーレスらの新思想なども参考にしました。私らは敗戦を迎えてすぐ準備をはじめ、9月早々に旗揚げしました。かつて高野実が「俺は10月に総同盟の再建に飛び回っていたよ」と言っていましたが、私らの動きはそれより1カ月も早い。事務所を有楽町駅に近い銀座の大阪ビル内に置きました。

——代表者はどなたですか。

三戸 代表なんて置きませんよ。メンバーのうちには戦時中に理研に潜っていた左翼前歴者、たとえば竹村悌三郎などの連中や、日本建設協会にいた柏原実、坂田政二、田中操吉、旧労農党の大沢久明、それに戦時中の昭和12（1937）年4月に個人雑誌『近きより』を出して軍国主義に抵抗した正木ひろし弁護士らのグループもありました。メンバーは多方面にわたっていたのです。細谷（松太）さんは入ってい

ません。彼は終戦時は実家の山形に疎開していたのです。

この新民主主義同盟も、その多くが日本共産党に入ってしまう、半年ぐらしか存続していない。私は終戦後の1年間は新民主主義同盟に籍をおいて、東芝小向工場の了海明治さんや日本無線の石井安一さんなど戦前の活動家の協力を得て、東芝、日本電気、沖電気、日本無線など組合結成のオルグをしていました。了海さんは東芝労連の初代の委員長を務めた人で、落合英一君が動き出すのはこれよりずっと後のことなんです。

私は半ば専従的に、手弁当で組合結成のために走り回っておりました。子供が4人いて、生活はとても苦しかった。けれども私は改造社版の『マルクス・エンゲルス全集』（1928年）などこの種の本を隠し持っていて、当時それが古書店で高く売れました。また家にシンガーマシンがありました。当時、マシンが有るということは大変なもので、女房はそのマシンを踏んで家計を助けてくれたのです。

日本労働組合の再建

三戸 新民主主義同盟の思想は、かつての無産政党の系譜でいえば合法左翼における労働農民党の系統、あるいは“人民戦線支持派”といってもよいかもしれない。全体としては“容共”ですけれども、カ・ペ（K・P）のいき方には反対だという雰囲気が共通の基調としてありました。

大沢久明は戦前、労働農民党で出発しています。戦後は、のちに社共共同運動で共産党に入党したけれども、当初は日本社会党に入って中央委員にもなっています。

日本の労働組合は戦後、占領軍の民主化政策の一環として上から奨励され、結成された経過があります。日本共産党はこの占領政策にうま

く乗りました。共産党は組織拡大の一環として、これまた上から労働組合を組織し、これを産別会議という中央組織にまとめました。日本の労働組合は権威主義的に、上から集権的につくられたものなんです。ポツダム組合といわれる所以です。

私らが当初、新民主主義同盟においてめざしたのは、労働組合を社会的に独立した存在にしたい、ということだったのです。共産主義であれ社会民主主義であれ、イデオロギーがどうのこうのということよりはむしろ、労働組合主義の立場を堅持すること、多少面倒で時間がかかっても労働者自ら組織結成を進め、形態としては産業別組合の方向にしたい、というのが私らの願いでした。

労働組合が、産業別組合という形態になっておれば、労働運動はそれだけ社会的な広がりや意義をもちます。ところが占領軍による労働組合早期結成の勧奨や、経営側も本能的にこれを望んだわけですが、日本の労働組合は企業単位に、上から企業別組合として一挙的に結成されてしまったのです。

日本共産党の労働組合指導

三戸 占領期の日本労働運動を回顧してみると残念に思うことは、共産党が当時、労働組合に対する方針・態度において左翼労働組合主義に立っていたことです。左翼労働組合主義においては、労働組合は“共産主義の学校”に過ぎない。もちろん共産党にも、たとえば神山茂夫などはロゾフスキーやピアトニツキーの左翼労働組合主義論について「これは間違った理論である」と批判しておりました。しかし徳球（徳田球一）らの指導は左翼労働組合主義そのものだったのです。

左翼労働組合主義において何よりも問題なのは、労働組合の独立性を認めないということに

あります。産別民同の運動は一言でいえば、労働組合の自主性と独立性を要求した運動でした。

要するに、産別民同の運動は労働組合の自己確立運動なんです。戦後初期、私が自ら新民主主義同盟を通じてその結成をめざした労働組合というのは、政党とは一線を画す、あるいは、政党から独立した自主・独立の組織だったのです。

——日本労働運動の再出発の時点で、とうぜん左翼労働組合主義は清算しておかなければならなかったのですね。

三戸 そうです。“獄中18年組”は左翼労働組合主義に内在する問題について理解できなかったのだろう。徳球は当時、労働組合を独立した社会的存在としてではなく、共産党の下請け機関や付属物であるかのような、あるいは後でも述べますが“伝導ベルト”ぐらいにしか考えていなかったのです。

——日本共産党の最初の労働組部長、正式名称は「労働組部兼農民部長」という名称であったようですが、初代の部長は神山茂夫氏でした。神山氏は当時、日本共産党においてはもっとも高い理論レベルにあったのではないかと思います。彼も“人民戦線派”だったのですね。

三戸 神山は戦前、昭和5（1930）年6月に全協指導部の極左的な偏向に反対して佐藤秀一、南巖、内野壮児らと全協刷新同盟を結成しました。全協刷新同盟の運動は、ある意味で戦前における産別民同運動といってもよいかもしれない。

神山は労働組合運動の歴史と理論を知っている数少ない指導者の一人で、戦後も左翼労働組合主義の問題点を指摘し、これを批判しておりました。だから徳球は“俺に楯突くやつ”として神山を嫌い、昭和21年に入ってすぐ労働組合

部のポストから外したのですよ。私は、神山を支持するわけではないが、彼には骨があった。彼は自説を曲げなかった。

占領期の日本労働運動を顧みてもう一つ残念に思うことは、共産党の中央において労働組合対策を担当していたのが長谷川浩、伊藤律、保坂浩明であったことです。彼らには新人会、あるいは共青や学生運動の経験があっても、労働運動の実践経験は無かった。理論面の勉強はさておき、不幸なことですよ。

この点も紹介しておきます。産別会議に書記は50人くらいおりましたが、ほとんどが大学出の人でした。しかも第一高等学校・東京帝大の出身者が多かったのです。長谷川浩、伊藤律、保坂浩明も一高・東京帝大組です。長谷川と伊藤は徳球の側近で、繰り返しになるが二人には現場の経験がない。長谷川と伊藤は産別会議の事務局の一高・東大グループに直接、指示・連絡をし、あるいは“水曜会”その他のフラクションを通じて物事を決め、労働運動に対する指導を行おうとしたのです。とうぜん現場の要求とはかけ離れてしまいます。

——長谷川浩氏が労働運動対策の責任者になる前に、伊藤憲一氏が、指導をになっていた時期がありました。伊藤氏は戦前、総同盟左派——組合同盟で労働運動を実践された経過がありますね。

三戸 ええ。結党時の日本共産党において、労働組合運動などで指導的立場に立った人で戦前に労働運動の経験をもつ人は何人もいない。細谷松太、神山茂夫、伊藤憲一、春日正一はその数少ない経験者でした。その数少ない経験のある神山も伊藤も、徳球にとってはいささか煙たい存在であつたらしい。細谷さんは徳球には距離を置いていました。だが長谷川浩にしろ伊藤律にしろ当時、徳球に引き立てられて“出世”したのです。

伊藤（憲一）君が、早々に日本共産党に復党したのは意外でした。伊藤君は、私らが準備した自主・独立の労働組合を結成しようという動きをいわば潰して、工場代表者会議を開いたり、労協（労働組合協議会）を結成して、労働組合をひとまとめに共産党の方へもっていったのです。

伊藤君が春日正一らと関東労協を結成したのが、昭和21年の1月末のことです。共産党は各地で工場代表者会議を開いて、労働組合を上から一挙的につくり、出来た組合に投網を掛けて関東労協に集め、そしてこれを産別会議としてまとめていったわけです。だから、共産党が産別会議に対して“俺らがつくった組合だ”という意識をもつのは当然だと思うのです。

斎藤一郎について

三戸 斎藤（一郎）君は産別会議の書記の中でも貴重な存在でした。彼も、時事通信社の記者であった山崎早市と同様に、初めは徳球の側近で、いわば“情報係”となっておりました。けれども斎藤君は民主化運動に走った私らの考えや意見を認め、あるいは代弁し、また私らの動きを漏らすということも無かったのです。この点は、現在でも彼に感謝しています。もし私らの産別民同を旗揚げする前の動きが事前に徳球に漏れていたら、きっと潰されていたと思いますよ。いやいや、風向き次第では、斎藤君も民同の結成に加わったかもしれません。

私と斎藤君は現場出身という点もあり、信頼感がありました。だから私は斎藤君と一緒に産別会議の運動や指導のあり方について、よく徳球に文句を言いに行きました。

私らは徳球と怒鳴り合いの喧嘩をよくしました。あるときその怒鳴り合いの最中に、伊藤律がでしゃばり出て私らに何か言ったので、斎藤君が「伊藤っ、お前なんかこんなところでし

ゃばり出る資格など無いっ」と逆にしかりつけ、伊藤律が黙り込んでしまったことがありました。長谷川浩も伊藤律も、頭が切れるから徳球にとっては便利な存在だったのだろうけれども…。

斎藤君には『二・一スト前後——戦後労働運動史序説』（1956年）をはじめ多数の著書があります。戦後すぐの時期の、日本労働運動の基本文献だと思います。実に詳しく、また共産党の労働組合運動の指導などについても問題点を指摘しています。

だが、それにしても斎藤君の死は淋しかった…。大谷や私らは、訃報を受けて葬式に駆けつけましたけれども、K・P関係者その他は顔を見せなかったのです。冷たいものです。ちなみに、私は葬式に出て初めて知ったのですが、彼は斎藤茂吉の血縁者だったのです。

高野実の「統一労働同盟」構想

——この機会にぜひお聞きしたいことがあります。かつて藤田若雄氏が、労働組合を組織するため日本共産党が採った工場代表者会議の方式について、「これは工場ソヴェト運動の展開であり、労働組合のそれではない」（『藤田若雄著作集』1982年）と指摘したことがありました。日本共産党がなぜ、工場代表者会議の方式を採用したのかという点が一つです。

また、日本労働運動の不幸は、再出発の時点において労働組合が右派の総同盟と左派の産別会議とに分裂し、さらに中立系の日労会議も結成され、統一再建が実現できなかった点にあると思います。

総同盟一本化の路線、すなわち共産党・産別会議系の連中が総同盟に入り、左派を形成するという選択肢もあったと思うのです。こういう考えは邪道でしょうか。総同盟と産別

会議に分裂して結成された結果、日労会議が結成されたという経緯があり、両者が統一していれば日労会議も結成されておらず、日本の労働組合は統一した形で再出発したと思います。

三戸 前者については、共産党やかつての評議会・全協の指導者の連中が左翼労働組合主義の立場を採っていたからですよ。根源はここにあります。左翼労働組合主義の具体的実践形態が工代会議運動なんです。

工代会議の戦術は、要するに大衆動員の戦術であり、共同闘争を行うための結集体なんです。労働組合を労働者の自主・独立の組織とは見ず、極端に言えば共同闘争の動員組織としてしか見ていないわけです。この工代会議の方式は評議会以来、戦前の左翼労働組合が採用してきた基本形なんです。

後者の、あなたが指摘した、統一した形で日本の労働組合を再建しようという構想、これは実際にあったんですよ。これが理想的であり、かつ実際に希求されました。高野実など総同盟の左派はそういう考えでした。

——「統一労働同盟」の構想ですね。

三戸 どんな名称だったか知らないが、総同盟一本化、あるいは労働組合をとにかく統一した形で再建したいという動きは実際にありました。

当時、高野実、荒畑寒村、山花秀雄などが野坂参三や神山茂夫らと実際に話し合っているのです。神山は日本共産党の最初の労働組部長ですよ。これがうまく行かなかったのは、共産党系の左翼だけに問題があるのではなくて、総同盟にも問題があったのです。総同盟の頑固さが、徳球に口実を与えてしまった。

昭和7（1932）年1月に、右派の社民党（社会民衆党）が反ファシズム・反共主義・反資本主義の“三反綱領”を決めました。前と後ろの

題目はともかく、中心は反共主義ですよ。そしてその年の4月に日本労働倶楽部が改組され、総同盟と海員組合が中心となり、それに中間派の全労なども参加して日本労働組合会議が結成されました。この日労会議も“三反綱領”を掲げたのです。私は当時、全協“革反”のオルグでしたが、この“三反綱領”にはカチンときました。

戦後を迎えて、私らにも世界労連の組織方針が伝わってきました。またかつての人民戦線の経験から学ぼうという意識もあり、私自身、周りの連中も“昔の運動ではいけない”と自覚していたのです。ところが総同盟右派の連中は、依然として“反共主義”にとらわれていました。

日本共産党の指導部も、ある時点までは労働組合の統一再建について前向きで、理解を示しておりました。しかし総同盟の方はどうかというと、戦後になっても“三反主義”の尾を引いていて、この場合は反共主義ですけれども、総同盟は早々に社会党支持を決めるなど自らの陣営を構えてしまったのです。松岡駒吉ら総同盟右派の旧態依然の姿勢・態度が、徳球に左翼労働組合主義を採用する口実を与えたという点ではやはり総同盟にも責任があるのです。それにしても野坂（参三）さんは、いざというときはダメな人だったのです。

——どういふことですか。

三戸 高野実さんら総同盟の左派との話し合いは、片っ方の共産党の場合、野坂さんが代表者だったのです。高野さんによれば、神山（茂夫）もそうだったのですが、野坂さんは当初、労働組合の統一再建に乗り気だったのです。野坂さんが「よし、これで行こう」と決断し、党の指導部を説得したならば実現したかもしれない。

とにかく絶好のチャンスであったことは間違

いない。たぶん徳球に押し込められたのだろう、野坂さんは間もなく態度を変えました。あれは、徳球の一押しで左翼労働組合主義の型にはめられていったのだと思います。

労農派の連中には、いまあなたが言ったような発想がありました。高野さんは戦前、共産党には入っていたかどうか知らないが、とくにそういう傾向にあり、荒畑寒村さんもそうでした。労農派の連中には、共産党系の左翼と結ぶことにあまり抵抗感がない。総同盟であれ社民（社会民主主義の政党）であれ、彼らの中に入って左派を形成し、体質を変えていこうという考えがあったんだけど、共産党はこれを否認したのです。左翼労働組合主義は“社民排撃論”でもあるのです。

他方で、共産党の方にも戦線統一を志向する潮流があったのです。産別民同の運動が始まる前までは、関西地方で、たとえば共産党の幹部であった西川彦義君などは徳球らの左翼労働組合主義の指導に反対していました。彼は上京のたびに産別会議の事務局に立ち寄って、私らにも「これじゃダメだ」と党の方針を批判していました。

津脇喜代男さんは戦後、私鉄総連を結成した人物ですが、彼も、あるいは本山茂貞もそういう考えでした。彼らは戦前との関連でいえば、全労統一会議のみならず、共産党も中に入れよう、あるいは入るべきだという考えなんです。津脇喜代男、西川彦義、本山茂貞、松田長佐衛門などはその昔、人民戦線派で合法左翼の活動を大事にしましたし、社会大衆党に入って左派を形成してもよいじゃないか、という考えなんです。関西地方にはそういう伝統があります。現実主義なんですよ。

余談ですが西川彦義は戦前、津脇喜代男さんの紹介で日本共産党に入ったのです。本山茂貞さんは昭和4（1929）年8月、総同盟第3次分

裂における中心人物で、戦後すぐナショナル（松下電器）労組の初代の書記長となりました。加藤勘十が芦田内閣で労働大臣になったとき、秘書官を本山にしようという動きがありましたが、総同盟の右派が横槍を入れて就任できなかった人物です。

日本共産党が戦後、左翼労働組合主義に立った理由の一つに、総同盟側にも問題がありましたが、共産党の側にも問題があったと考えるのが妥当だと思います。だが同時に、「やむを得ないな」と思われる事情もありました。第2次世界大戦におけるソ連の果たした役割の大きさと、結成をみた世界労連において、世界労連はのちに分裂するわけですが、左翼的な潮流が中核を握っておりました。野坂（参三）さんだって、亡命から帰国したばかりで日本労働運動の事情はわからなかっただろう。徳球など“獄中18年組”が絶対的な指導を行っていたわけで、私自身、共産党が左翼労働組合主義に立ったのはやむを得なかっただろうと思っています。

産別会議の書記となる

——三戸さんが日本共産党に復党されたのはいつですか。

三戸 昭和22（1947）年の2・1スト直後のことです。産別会議の事務局に書記として入ったとき、私は共産党に戻るつもりはなかった。それよりも新民主主義同盟の活動の一環として『労働運動』を出す準備をしていました。それというのは、以前に私は外務省の神谷茂という人の紹介で、当時、有楽町に事務所があった世論調査研究所に嘱託のような形で小遣い稼ぎをしていて、結構忙しかったのです。その世論調査研究所に、高津（正道）さんと仲がよかった近藤栄蔵がいました。私は、日本社会党の書記をしていた石坂平らの紹介で近藤さんと知り合ったのです。

——近藤栄蔵氏が世論調査研究所におられたのですか。

三戸 ええ、関係しておりました。岡本清一も同志社大学に行く前は働いていましたよ。近藤さんは堺利彦さんと日本共産党を結成した一人です。近藤さんは大正時代に、大杉栄や高津正道さんと『労働運動』（第2次）をやっていて、そうした経緯も思い出され、昭和22年1月に新しい『労働運動』（有紀書房）を発行したのです。

この前、あなたは『労働運動』が産別会議の機関誌とか、産別民同の機関誌じゃないかと言っていたけれども、私らの『労働運動』は当初、新民主主義同盟の機関誌として創刊したもので、のちに産別民同の機関誌的な役割を果たしていたと思います。明かしますとスポンサーは社会党の下条恭平です。下条さんは社会党左派の“五月会”や、鈴木（茂三郎）さんの社会主義政治経済研究所にも資金を提供していましたよ。

——下条恭平氏は西尾末広氏と懇意で、右派ですよ。

三戸 そうです。右派です。とにかく下条さんには金があり、『日刊工業新聞』の創刊を助けたり、浅沼（稲次郎）さんが社長をしていた社会党右派の機関紙（『日本社会新聞』）にも資金を提供しています。

さて、話を元に戻します。私が入党した経緯ですが、あるとき用事があって産別会議の本部に出かけたのです。そのさい細谷（松太）さんや、何人かの書記から「産別会議にぜひ来てくれ」と言われたのです。細谷さんは当時、産別会議の事務局次長で、時おり会っていました。私は共産党に戻るつもりはなく、また産別会議の書記に就くという希望を彼に伝えたこともなかった。

——でも復党され、産別会議の書記になられた…。

三戸 そうです。戦争が終わってすぐ、こぞって復党した理研の連中から「戻れよ」と言われていたし、かつての仲間からも誘いがありました。けれども私自身、心が動かなかったのです。しかし皆から「来てくれよ」と何回も頼まれれば、心は動きますよね。

産別会議の書記は全員が共産党員でした。当然、共産党員でなければ産別会議の書記にはなれない。書記のうちには「私が推薦人になるよ」といつてくれた人もいましたが、私は自分で直接手続きをとろうと代々木の本部に出かけました。

徳球の部屋は当時、二階にありました。私は二階に上る階段のところで偶然、袴田里見と会ったのです。袴田は「おうっ、しばらくだね。君はどこで活躍しているんだい」と言ったのです。袴田とは戦争が終わって初めて会いました。私は彼に「活躍どころじゃない。俺は党にも入っていないよ」と返事したら、袴田は「三戸君、それは困るよ」と言われ、私はそのまま袴田の推薦で復党の手続きをしたのです。

——復党には審査があったそうですが。

三戸 いや、審査など無かった。私は昭和7、8年ごろ、袴田と連絡をとりながら全協や共産党の活動をしていました。彼は私が復党した当時は統制委員会の議長をしていたと思います。だから復党なんて、紙片に名前と住所を書いておしまいですよ。袴田は私をよく知っていましたからね。

私は復党して、産別会議の書記となっただけで戦前派のせい、事務局細胞のキャップとなりました。そして昭和23年2月、私が党を出たあとは、これも一高・東大組の井出洋君がキャップになったのです。

4 産別会議の自己批判

最近における産別民同の研究

三戸 最近、兵頭淳史という若い研究者が「産別会議民主化同盟の成立過程」（本誌第451号，1996年6月）を発表しました。さっきあなたからコピーを頂きましたが、私はもう読んでおります。

最近の若い研究者の見解は、私にはとても理解できない。産別民同の運動というのは、日本共産党の労働組合に対する引き回しに反対する運動、労働組合が自主性と民主性を回復するための運動という理解が、定説あるいは通説のような形で厳として存在しているわけです。ところがこの兵頭論文においてはそうじゃないのです。

兵頭さんの論文は、戦後の日本経済がどういう方式で再建・復興を果たすのかそのあり方において、産別会議の指導部の中に社会主義革命の路線で行くのか、それとも修正資本主義の路線で行くのかの路線対立があり、そして後者の修正資本主義の路線で行くというのが産別民同なんだ、という趣旨なんです。まったくトンチンカンな理解であり、信じられない見解です。産別会議の指導部にそんな対立や論争など無い。私らが「修正資本主義の路線」を肯定して立ち上がったなんて…、誤解もいいところですよ。

——兵頭淳史さんの論文は、東大社研におられた山本潔さんの著書『戦後危機における労働運動』（御茶の水書房，1977年）の影響を受けています。分析視角を含め、論理構成をみてもそう感じました。僕自身、彼の論文を読みまして、産別民同に関する最初の本格的な研究ではありますけれども、いくぶん無理に論理を組み立て、かつ文献を引用してい

るという印象をもちました。

三戸 そのへんは私にはわからない。

——山本潔さんの論理は明快です。山本さんはまず、占領期における労働運動の分析枠組みとして“資本主義か社会主義か”が問われた時代であると捉え、これを基本軸に五つの路線および戦略目標を設定しておりました。そしてその一つに、日本民主党や日本社会党の左派、あるいは高野実ら総同盟左派が採った修正資本主義（社会化）＝生産復興、をめざす路線があり、具体的には経済復興会議の運動として展開された、と理解されるわけです。

三戸 研究でどなたの影響を受けようが、運動の性格と内容を正確に捉えていただきたい。とにかく、私らは日本共産党の組合支配に反対して立ち上がったのです。修正資本主義に賛成したからでも、あるいは社会主義革命とか民主主義革命とか、共産党の戦略目標を支持する支持しないとか、そういうことで立ち上がったのではないのです。私らは修正資本主義なんかに賛成していない。

こういう理解では困ってしまう。私らの産別民同の運動がなぜ起きたのか、どういう歴史的背景があるのか、どういう物の考え方が基礎になっているのか、もし産別民同の研究をなさるのであれば、日本における労働組合主義の形成や運動や特質などを視点に入れて分析してもらいたいのです。戦前の、佐藤秀一や神山茂夫らの全協刷新同盟の運動も、ある意味では民同運動とつながる面があります。そういったことについても視野を広げて研究してほしい。

——三戸さんは先ほど話に出ました『労働運動』の1948年3月号、すなわち産別民同が旗揚げした翌月の号に「産別の生産復興闘争批判」というタイトルの論文を発表され、産別会議における経済復興運動のあり方につい

て激しく批判されておられますよ。やはり日本経済の再建のあり方をめぐって、産別会議の指導部に何らかの路線や政策をめぐっての相違があった、と受けとめるのが自然だと思うのですが。

三戸 誤解しないでもらいたい。あの論文は、たしか生産復興運動のあり方について問題にし、共産党を批判したのです。あれは第一、私らが産別民同の旗揚げをした後に発表した論文ですよ。

あの論文は、生産復興の運動が、たんに資本・経営者に対して「何々を寄こせ」とか「賃金をあげろ」とかの物取りの運動だけであってはならないこと、また生産を増強すれば、倒産や工場閉鎖に追い込まれなくて済む企業が現実存在するのだから、生産を自主的かつ積極的にとりあげるべきだ、という趣旨で述べたのです。総同盟左派の高野実や経済同友会が中心となった経済復興会議に参加すべきだ、と強調した論文ではないのです。私らは産別民同の旗揚げに際して、高野実や社会党の鈴木（茂三郎）さんと打ち合わせをした事実は一切ない。この点は念を押しておきたい。

——わかりました。でも三戸さんは同じ時期に、こんどは「産別民主化同盟の主張」と題する論文を毎日新聞社の『労働評論』（第3巻5号、1948年5月）に発表しております。この論文でも三戸さんは、日本共産党の「食わせろ」「寄こせ」というスローガンに対する批判や、生産復興闘争に無条件に「軸心」を置くべきである、との見解を示されておられますが…。

三戸 何回も言いますが、あの論文も修正資本主義の路線を支持するとか一切書いていないはずですよ。日本経済の再建のため、生産復興が労働者階級の社会的責任であり、歴史的な任務でもあり、かつ労働戦線の統一のためにも不可

欠な闘争であって、これは労働組合自身、自主的に取り組む必要があるという趣旨で述べたものです。日本共産党自身、もう早くから生産復興の重要性を指摘していましたし、修正資本主義路線で行く、行かないなんて問題にもなっていないかった。

当時、私はいろいろな雑誌に求められて原稿を書きました。しかし兵頭という若い研究者が言うような、私らや産別会議の指導部に修正資本主義路線を推し進めるグループが存在した、そんな趣旨で書いたものはないと思う。

ついでに言うともむしろ私自身は、高野さんの経済復興運動が資本・経営側に傾きすぎ、もしかしたら取り込まれてしまうのではないかと心配した時期もあったのです。産別民同の運動理念は、政党だけでなく権力、資本・経営からも独立して、あくまでも組合民主主義を守ろうということにあったのです。

——わかりました。

産別“自己批判”の背景

三戸 さて、本題に入ります。民同運動は直接には、昭和22年5月10日、産別会議の幹事会がそれまでの運動を自己批判し、執行委員会も5月15日にこれを承認し、その当日、自己批判の声明を発表したことが発端となっています。

問題はなぜ産別会議が自己批判しなければならなかったかです。

自己批判の内容については後で詳しく紹介しますが、5月10日に発表された幹事会の声明では産別会議が特定政党の、すなわち日本共産党の指導下にあるとか、指導部と組合員が遊離しているとか、ストライキに偏って日常の職場闘争を疎かにしているとか、などが問題点として指摘されていました。

このような産別会議における指導・運営上の問題は、昭和22年の2・1ストまで顕在化するこ

とがなかったのです。産別会議は前年の10月闘争で、たとえば賃金引き上げ、団体協約の締結、首切りを撤回させるなど事実上勝利し、さらに2・1ストへ向けて盛り上がっておりました。吉田茂首相が“年頭の辞”の放送で労働運動の指導者を“不逞の輩”と非難したのも、むしろ2・1ストへの機運を盛り上げたと思います。まあ産別会議に時代の風が吹いていたのです。

——風が止まったのは、いつですか。

三戸 2・1ストだと思います。2・1スト以降、マッカーサー司令部が強権的になりましたし、経営者側が産別会議の攻勢に危機感を抱いて猛然と反撃に出ました。また鈴木茂三郎・加藤勘十さんら社会党左派も「共産党絶縁声明」（1947年5月15日）を発表し、共産党とは一線を画すようになりました。

2・1スト以降、経済復興会議や全労連が結成されて統一の機運が高まったという学者がいますけれども、実態は逆で、政党であれ労働組合であれ、むしろ分裂基調が色濃くなって来ていました。

さらに衝撃的であったのは、昭和22年4月、第23回総選挙と戦後最初の参議院選挙に日本共産党が惨敗したことです。徳球が選挙前、共産党は50名は当選すると豪語していたけれども当選者はたった4名です。参議院選でも当選者は4名でした。とくに参議院選では産別会議議長の聴濤克巳が組織内候補として共産党から立ったのですが、落選したのです。産別会議は当時、総同盟の2倍を越す160万人の組織人員を擁し、当選確実と予想されていたその聴濤さんが落選しました。

社会党が衆議院で143名、参議院で47名を当選させ両院で第1党となりました。これはある意味ではバブルです。総同盟や日農のほか、とり立てて足掛かりを持たない社会党が第1党となり、2か月後に片山内閣をつくります。

選挙の結果は、労働者が共産党よりも社会党を支持したということです。産別会議に加入する労働者が、機関決定に反して社会党の候補に投票したのです。要するに、労働者の全体が共産党や産別会議の方針や指導を拒否したということだと思います。

日本共産党の対応

——日本共産党は、民意の結果をきちんと分析する必要がありましたね。

三戸 そうです。産別会議の指導部も同じです。機関決定や投票を促す指導が執拗にあったにもかかわらず、日本共産党が二つの選挙に敗北したことは、組合員が産別会議の運動に批判的で、離反していたことを端的に示していると思います。産別会議執行部はこの結果を重く受け止めて組織と指導を点検し、かつ組合員に新しい運動のあり方を提示する必要がありました。

——『新産別の二十年（Ⅰ）』（1969年）に、この巻は奥付を見ますと細谷松太さんが執筆されたようですが、細谷さんが「共産党本部は二・一ストと四月総選挙の結果による動揺が、産別会議さん下の組合に生ずることを察知し」て、自己批判を行うよう事前に指導したと述べておられます（同書58頁）。三戸さんはこの点について、すなわち日本共産党が二つの選挙に惨敗した事態の深刻さを認識し、その対策として自己批判を行うよう産別会議に指導されたという事実をご存知ですか。

三戸 5月10日の幹事会の前に、共産党が産別会議に対して“自己批判を行え”という指導ないし指示があったかどうかの質問ですが、私は知らない。通常、この種の問題は文書で通達するという性格のものではないのです。実際にあったとすれば、フラクションを通じてのもの

だったと思います。

——細谷さんは、続けて「（日本共産党は）先手をうって産別に自己批判をさせ、動揺をおさえさせる手はずを、フラクションを通じてとらしめたのですが、これが明確を欠く方法ですすめられたので、産別会議幹事会は急迫せる内部要請にうながされて、自己批判を独走させたのである」（58頁）と述べています。

この文章を読むかぎり、日本共産党が産別会議に対して自己批判を行うよう内部指導したのは事実のようです。このことは、共産党自身、2・1ストの不発に対する不満や、4月における衆参二つの選挙で共産党が敗北した事実を深刻に受け止めていたことを示していますね。

三戸 ええ。二つの選挙の惨敗は共産党にとって衝撃でした。そして、それが大衆や労働運動に大きな影響を及ぼすであろうことも、共産党において認識されていたと思います。当然、自己批判は避けられない事態でした。しかし自己批判は本来、共産党自身が行わなければならないのでした。共産党が自己批判を行わず、産別会議にそれを求めるのは本末転倒ですし、産別会議が共産党からフラクションを通じて指導・指示を受けて自己批判を始めるのもまた問題だと思います。

産別内部からの批判

三戸 産別会議における自己批判は、共産党から指導されたとか外部から提起されたとかでなく、自ら早急に行わなければならない切迫した事態となっていました。5月10日に幹事会が自己批判を行う前に、傘下の組合に産別会議の指導に対する拒否反応が方々で起きていたのです。

たとえば当時、日立亀有と並ぶ全日本機器労

組の拠点工場として三菱下丸子（正式名称は三菱重工業東京機器製作所下丸子工場）がありました。産別会議の幹事で、のち共産党から出て都議になった山崎良一さんがいた工場です。この工場細胞は100人を超す都内でも最大最強の党組織といわれていましたが、坂本登というその細胞のキャップが率先して離党し、これに何十人もの党員が集団で脱党した事件がありました。

——どんな理由で？

三戸 あまりにも組合運営が共産党の方針と直結し、組合員の要求を反映した運動となっていないということだったと思います。三菱下丸子の場合、組合役員の大半が共産党員でした。組合の引き回しも度が過ぎ、細胞の内部でも問題となっていたのです。

新聞単一（日本新聞通信放送労働組合）でも、産別会議の運動や指導に対する不満が高まっていました。新聞単一は2・1ストの翌3月27、8の両日、第2回大会を開きましたが、このとき毎日支部が脱退しています。脱退の理由は産別会議が共産党に支配され、新聞単一に自主性がないこと、ストライキに偏って職場の問題を重視していないこと、などがあげられていました。読売支部につづき毎日も脱退して、新聞単一の一角が崩れたのです。朝日、NHK、中部日本、岡山合同その他の支部も、前後して産別会議からの脱退を表明していました。

産別会議の自己批判問題は、（昭和22年）5月6日、新聞単一の委員長であった川添隆行君が自己批判を行うよう機関に正式に申し入れたのがきっかけでした。委員長自ら“自己批判をしてくれ”と執行部に申し入れをしなければならぬほど、新聞単一における反産別の感情は沸騰していたのです。

この感情は5月27、8の両日、早稲田大学の大隈講堂で開かれた新聞単一の第3回大会で爆

発しました。

私はこの大会に招かれ壇上におりましたが、代議員が執拗に産別会議の運動方針と指導に対する批判を行ったのです。中心となって批判したのが朝日新聞社の前の会長だった広岡知男と、この間まで論説主幹だった森恭三でした。広岡さんは当時、朝日支部の分会長で森さんは支部長でした。二人は入れ代わり立ち代わり質問し、とくに森さんは「読売と毎日の脱退は、産別会議の運動路線が政治的イデオロギーに偏っていたからで、もし産別会議がきちんと自己批判をおこなわなければ朝日支部も脱退する」と声を大にして述べたのです。

答弁に立つ委員長の川添隆行も言葉を失い、困り切っていました。朝日支部は当時、NHK支部と並び新聞単一の要の支部です。川添君は「気持ちはわかるがここは一つうまく頼む」と浪花節で口説いていましたけれども、二人は承知しなかった。新聞単一はその年のうち産別会議から脱退したのです。自ら呼びかけて結成しておいて、新聞単一はその産別会議からいの一歩に脱退したのです。

——無責任ですね。

三戸 いや、無責任ということでもないでしょう。それだけ組合員の新聞単一の執行部や産別会議の運動・指導に対する批判が強かったのです。

産別の執行部に対する批判は、新聞単一だけでなく印刷出版、化学、全炭、全通にも沸き上がっていました。当時、印刷出版の書記長は松本慎一さんでした。彼は産別会議の幹事でもあり、戦前に私より早く共産党に入った戦前派の党员です。松本さんは一高・東大で尾崎秀実と親友だったようで、とにかく誠実で良識の人でした。その松本さんが「産別は真摯に自己批判しなければならない。組合民主主義は大事だ」と常々言っていました。松本さんの後任で、岩

波書店に勤めていた吉野源三郎さんもそうです。

化学から出て、産別会議の執行委員を務めた亀田東伍も「産別会議は誰が見てもストライキ主義を採っている。ストライキ一本では組合は支持されないし発展もしない」と主張していました。亀田さんは戦後に共産党に入った方ですが、松本慎一さんにしろ亀田さんにしろ、2・1スト以降、有力な共産党员から産別会議の運動・指導に対し“これでは駄目だ”とその改善を指摘されていたのです。

“水曜会”について

——細谷松太さんが「(日本共産党は)先手をうって産別に自己批判をさせ、動揺をおさえさせる手はずを、フラクションをつうじてとらしめた」(前出『新産別の二十年(1)』)と述べていますが、この場合のフラクションとは“水曜会”のことですね。

三戸 そうです。当時、産別会議の組織指導や運動に対しては徳田球——長谷川浩——細谷松太のラインが立てられていました。このラインは“水曜会”に直結していました。産別会議には単産ごとにフラクションがありました。“水曜会”とは産別会議の全体のフラクションで、各単産の委員長や執行委員を中心に、共産党の労対や中央オルグの連中を含めて参加していました。週一回、水曜日に集まって対策や当面の問題を議論し、共産党のお墨付きをもらって持ち場に帰るのです。“水曜会”の代表者は細谷さんです。産別会議の指導・運営は事実上、“水曜会”で決めていたのです。

このほか、産別会議には事務局細胞があり、この事務局細胞のキャップは私が務めておりました。産別会議は“水曜会”と事務局細胞の二つに仕切られていた、といってもよいかもしれません。

——僕は“水曜会”の名称について当初、毎週水曜日に集うという意味合いで命名されたと思っていましたが、どうも違うようです。生前、細谷（松太）さんの証言をまとめようと連絡をしたさい尋ねたのですが、昔の“水曜会”からとったらしいのです。

三戸 昔の“水曜会”…。ああ、第1次日本共産党の結成の前に、党の創立を意識して、その前提として再結集した“水曜会”のことですね…。そうかもしれない。

——ええ。日本社会主義同盟が解散（1921年5月28日）させられた後、分散した社会主義者のグループが山川（均）さんのもとに集まり、前衛党のあり方などについて研究がなされた時期がありました。そのときのグループの名前が“水曜会”です。田所輝明、西雅雄、上田茂樹、高橋貞樹らが中心で、徳田球一も参加していたようです。

三戸 そうか。産別会議の総元締めフラクションの名前は、第1次日本共産党の“水曜会”からとったのか。徳球が昔を偲んで命名したのかもしれない。面白い話だね。“水曜会”には山川さんも徳球もいたんですね…。水面下で理論研究や意思統一を試みていたのが“水曜会”であったわけです。

——産別会議の事務局細胞に、日本共産党の中央からの指令・指示などはあったのですか。

三戸 ありました。けれども産別会議の問題についてはまず“水曜会”で検討され、先に事務局細胞に伝えられることは無かったと思います。

細谷さんの肩書は産別会議の事務局次長でしたが、“水曜会”の代表者としての方が重要なんです。産別会議は当時、役員の現役制を採っていたため細谷さんは事務局長になれなかったのですが、実際は産別会議の指導の頂点に位置

していました。

幹事会の“自己批判”

三戸 さて、産別会議は新聞単一や印刷出版から自己批判を求める正式な申し入れを受けて、（昭和22年）5月10日、本部で幹事会を開きました。私自身、記憶が薄れてしまっていて、資料（労働省編『資料労働運動史』1947年版）によれば、このときの幹事は聴濤克己（新聞単一）、土橋一吉（全通）、鈴木栄一（化学）、津田正（鉄鋼）、中原淳吉（電工）、坂口康夫（国鉄）、佐藤泰蔵（電産）、津々良涉（全炭）、松本慎一（印刷出版）、山崎良一（機器）の10名です（312頁）。

幹事会は、結成以来の運動や組織運営について真摯に討議し、ここに記されているように「組織指導者と大衆との遊離の傾向或いはストライキ偏重的傾向の存在等を率直に認め、産別会議の飛躍の発展の為には今こそ組合の民主化を徹底し、幅のある組合運動を展開することが労働階級の生活を守り、更に労働者の手で民族経済を復興する所以である」（同）と確認しています。

私は、幹事会の認識や情勢判断は正しかったと思います。何よりも産別会議における問題点を明らかにし、自己批判の必要を認めておりました。このことは翌日に発表された声明書を読めば明らかです。声明書は冒頭で「幹事会は従来の運動方針並に組織運営の実際に根本的に検討を加えて次の如き結論に達し（た）」（『社会通信』第167号、1947年5月29日）として7項目の問題点をあげ、これを14、5日の執行委員会へ提出することを決めました。紹介しておきます。

- 1 組合機関と組合員大衆との遊離の傾向を解消し、組合とその運営を徹底的に民主化する。

- 2 特定の政党の指導にある如き印象を与えていた原因を除去し、大衆団体の自主性と規律を守るため組合機関の民主的選挙を行うと共に、組合員の政党支持の自由の原則を更に改めて確立する。
- 3 産別会議の基本運動方針の正当さを再確認するが、その実践にあたって生じた若干の偏向、たとえばストライキ偏重的傾向を是正し、日常闘争を活発に行い教育、文化、調査、厚生等の活動を精力的に実施する。
- 4 新憲法に保證せられている労働権その他基本的人権を確保するための闘争をおしすすめる。
- 5 経済危機の深刻化に際し労働者階級こそ民族経済復興の担当者たることの自覚に徹して生産復興に対する一層重点的な運動を展開する。
- 6 農民市民その他の団体と提携し物価安定、配給の確保、大ヤミの撲滅等の運動を展開し国民生活の安定につとめる。
- 7 労働者運動の分裂政策が強化されつつある今日、吾々は一層強く労働戦線の統一のために闘うことが必要であり、更に世界労連への急速な参加を実現するため運動をおしすすめる。

こう言っでは何ですが、この声明書は立派です。誠意が伝わります。蛇足ですが幹事会にしろ執行委員会にしろ、この種の声明書や運動方針書の原案は私ら事務局の書記が原案を作成し、協議のうえ機関の了解を得て発表するという形式をとっていました。書記のなかでおもに原案を執筆したのは斎藤一郎や、それに井出洋、大谷徹太郎君らで、それに私も入って作成していました。この声明も、そうではなかったかと思えます。

執行委員会の態度

三戸 幹事会の結論を受けての執行委員会は5月14、15の両日、京橋にあった第一生命会館の別館で開かれました。執行委員会では、幹事会が確認した7項目のうち前半の3項目の問題、すなわち（１）“産別会議が共産党の指導下にある”という印象を各単産の執行部や組合員が実際に抱いているのかどうか、（２）組合機関が独裁的な傾向を帯び、組合員大衆と遊離しているとすれば、どういう形で組合運営を民主化すべきなのか、（３）ストライキに偏重しているという傾向をどう是正するのか、などについて主に討議しました。

——幹事会が発表した7項目の自己批判の声明は、執行委員会でも、産別会議の組織・運動上の問題点として正式に確認したわけですね。

三戸 そうです。“産別会議が共産党の指導下にある”という印象がもたれていることについては、執行委員の全員がこれを認めました。ストライキに偏重していたという問題についても金子健太や津々良渉も含め、これを認めました。もちろん消極的な口ぶりの発言もありましたが、全通の長谷武磨から「自己弁護を行うのではなく、真摯に自己批判を行うべきである」との発言もあって、その方向での討議がすすんだのです。

——土橋一吉さんと亀田東伍さんが熱弁をふるったそうですね。

三戸 ええ。土橋さんは全通という産別会議の最大単産の委員長で、当時は非党員でした。その彼が幹事会の声明を全面的に支持すると演説したのです。土橋さんは、執行機関が組合員から遊離していること、共産党の色彩があまりにも強すぎる、ストライキ偏重傾向があること、総同盟に対してあれこれ非難する前に自らのことをきちんと点検し改めなければならない、とぶったのです。

亀田東伍さんの場合は、産別会議の運動がストライキに偏り、日常闘争について疎かにしてきたと批判しておりました。

このほか当日の執行委員会では、指導部における独裁的な運営やフラクションの問題も指摘され、政党と労働組合はまったく別個のもので両者に指導―被指導などの関係は存在しない、という発言などもありました。

結局、執行委員会は、先に幹事会が示した自己批判に関する7項目の声明を大筋で承認したのです。そしてこれを産別会議全体のものとして受け止め、かつ確認するために7月上旬に臨時大会を開くことを決めました。

“産別自己批判及び方針”

三戸 さて、産別会議の臨時大会の前に自己批判の内容や新しい運動方針案を作成しておかなければならず、執行委員会は5月18日に改めて委員会を開き、正式に「産別自己批判及び方針」を決めています。

これ（前出『資料労働運動史』）によれば、執行委員会は、産別会議が結成大会で採択した綱領と運動方針は「絶対に正しかった」と改めて確認しながらも、「その実践にあたっては若干の偏向のあったことは否定しがたい」として5項目を挙げています。5月10日の幹事会の声明や14、5両日の執行委員会で指摘された内容とほとんど同じですが、ここに紹介しておきます（同書316頁）。

- 1 個々の情勢を考慮せず、共同闘争を機械的におこなったところがあった。
- 2 機械的に政治ストライキを呼号したところがあった。
- 3 真の生産復興は反動政府の打倒なしにおこなわれ得ないということを強調するあまり、具体的に職場における生産復興運動の不充分なところがあった。

4 産別幹部の内に比較的共産党員が多くなった点、ならびに反動攻勢の誹謗、中傷に対する政治啓蒙活動の不十分によってあたかも産別が共産党の指導下にあるごとき印象を一般に与えていた。

5 産別幹部は一般組合員大衆と遊離の傾向にあった。

このように、この時点までの幹事会や執行委員会の認識は偏向を率直に認めていたのです。そして偏向を是正し、産別会議がさらに信頼されるためにも、（1）組合機関の民主的運営、（2）組合員参加の十分な討議、（3）政党活動と組合活動の分離、（4）生産復興運動の重視、（5）労働戦線の統一、など8項目の運動方針が挙げられていました。

先の幹事会でも5月10日の執行委員会でも、全員が自己批判の必要を指摘しておりました。また5月18日の討議を踏まえて、執行委員会が5月22日に発表したこの「産別会議の自己批判及び方針」も満場一致で決まったのです。私自身、もし産別会議がこの方向で改革されるならば組合員に信頼され、日本の労働組合を名実共に代表するナショナルセンターとして発展するだろう思い、かつ期待もしました。

自己批判の撤回の動き

三戸 ところが6月に入って、自己批判大会へ向けた準備の最中に“産別会議が自己批判を行うのはまかりならぬ”という空気が代々木の方から流れてきたのです。事務局も何かそわそわした感じになりました。共産党の方で、もし自己批判を行うと産別会議が党から離反してしまう、共産党に対する風当たりがこれまで以上に強くなるに違いないと思ったのでしょう。私らは当初、共産党の圧力もそのうち止むだろうと楽観していました。だって自己批判が必要であり、これをきちっと行うべきであることを産

別会議が正式の機関において決めたのですもの。

共産党は7月に入るや、労対責任者の長谷川浩や子分の保坂浩明らが『アカハタ』を通じて“自己批判はブルジョア的偏向で敗北主義である”というような非難・攻撃を繰り返しました。産別会議における各単産のフラクションや、本部のフラクションすなわち“水曜会”もこの時期、相次いで開かれ、自己批判を回避するための指導が党中央の主導で行われたのです。まあ切り崩しだったのです。

臨時全国大会の前日、昭和22年7月9日のことです。共産党は徳球の指示で、党員の代議員全員を代々木の本部に招集して、“水曜会”すなわちフラクション会議を開催しました。そして徳球の鶴の一声で、産別会議が行う自己批判は“坊主ざんげ”であり、ブルジョア偏向で危険であるとして、自己批判を行わないことを決めたのです。

自己批判はブルジョア的偏向で、危険である……。私も昔の共産党員です。共産党という立場において、この点は理解できます。

——どういふことですか？

三戸 自己批判を行うことは、産別会議のこれまでの運動が間違っていたという印象を世間に与えることになります。戦前派の活動家に特有の傾向として、被害妄想的な意識があります。すなわち、自分の方から弱点をさらけ出しますと、逆に外から、この場合は敵や反対派からですけれども、追い打ちをかけられてしまうという意識が働くのです。現実には戦後ですけれども……。これが戦前派の党員の感覚です。そこでフラクション会議は、自己批判は行わないということになったのです。

しかしその場合、誰かが犠牲にならなければならぬ。結局、産別会議の運動というよりも、問題は事務局の指導・運営が悪いということに

転嫁されたのです。

産別会議の組織指導を担っていたのは、フラクションのキャップで、事務局次長の細谷松太でした。悪いのは細谷であり、彼のブルジョア的な考えや右翼的な偏向の結果、このような事態に立ちいたったとして、産別会議の自己批判の問題を細谷個人の問題に矮小化してしまったのです。

臨時大会における質疑

三戸 産別会議の臨時全国大会は、昭和22年7月10日より13日の4日間、神田駿河台の明治大学講堂で開かれました。この大会は、産別会議が、内外に向けてきちんとした自己批判を行い、これを踏まえて新しい運動方針を決め、再出発するための大会だったのです。司会を務めた亀田東伍が、冒頭の挨拶でも「産別会議は自己批判をつうじて新情勢に対応する新方針を確定し、組織の拡大強化をはかるものである」とその意義を述べていました。

要するに、7月10日からの産別会議の臨時大会は“自己批判大会”と位置づけられ、組織と運動の問題点を総点検し、これを確認・是正し、そして再出発するための大会であったのです。

ところが実際はそうではなかった。討議が始まってすぐ、全日本機器の代議員から「巷に流布されている自己批判は幹事会の自己批判であって、産別会議の自己批判ではない。これは認められない」という“自己批判爆撃”を行ったのです。また、私の記憶では電産の代議員だったと思うけれども、「新運動方針案は内外情勢の分析において妥当を欠いており、全面的に書き直す必要がある。各単産から1名の代表者を出して新運動方針を書き直すべきである」という提案がなされました。

——前者の全日本機器の代議員とは、吉田資治さんのことですか。

三戸 いや、金子健太だったと思う。うん、金子健太ですよ。金子は戦前、全協の機関紙『労働新聞』の編集を担当していました。彼は、かつて山川（均）さんが主宰する“水曜会”にも参加していた古い党員です。

金子健太らの意見に対して、たとえば全通の長谷武麿が「幹事会と執行委員会が行った自己批判をないがしろにするのか」という反論を試みましたが、もう前日のフラクション会議で方針・方向が決められており、代議員の多くがこれに同調し、会場は緊迫しましたが、発言が撤回されることはなかったのです。

この臨時全国大会の質疑応答について、私は現在でもはっきり記憶しています。とくに全炭の津々良渉や、電工の委員長だった中原淳吉の発言は忘れられない。彼は、産別会議の役員に党員が多く、共産党に引き回されているという質問に対して、「共産党員は資質が高く、労働組合で献身的に活動するがゆえに信頼が高いのだ。信頼が高いから役員選挙に当選しているのだ。共産党への認識を深めさせることによって、産別会議が共産党の支配下にあるという印象も解消できる」と述べていました。

当然、非党員の代議員からは失笑が漏れました。彼自身、5月10日の幹事会で、共産党が実際に組合を引き回しており、ストライキも組合員大衆から遊離した形で決められたとして、産別会議が自己批判を行う必要があることを率先して主張していたのです。

——豹変されたのですね。

三戸 いや前日に“水曜会”が開かれ、意思統一されていたので、それに添っての発言だったのでしょう。

大会で自己批判問題の報告を行ったのは中原淳吉です。中原さんは、産別会議の運動や組織運営に基本的な過ちはないと断言し、焦点となった産別会議のフラクション活動について「活

動が、組合の統制の範囲内で行われるならば何ら問題はなく、非難の対象とはならない。共産党員がもっとも献身的に活動した結果、産別会議が共産党の指導下にあるがごとき印象を与えてしまった」として、日本労働運動におけるフラクション活動の問題点について有耶無耶にしてみましたのです。

私の記憶では、大会初日の冒頭、徳球が挨拶に立ちました。当時、徳球が産別会議の臨時大会に出て挨拶を行うこと自体、異例だったと思います。徳球は力んで、額に流れるばかりの汗をかきながら「自己批判とは坊主ザンゲであり、敵の挑発に乗ることである」と、例の迫力満点のアジテーションを行ったのです。この挨拶で大会の空気が一挙に変わり、前日の“水曜会”において討議・決定された筋書き通りの結論が、大会決定として導きだされたのです。

この結果、日本労働運動の発展のために不可欠であった自己批判問題の処理が有耶無耶にされ、結局は、産別会議が組合員大衆と結びつかなければならない、という当たり障りのない結論が導き出されたのです。

私は、産別会議がこの時点できちんと自己批判を行っていたならば、再生は可能だったと思います。産別会議が運動と組織の問題を点検し、自己批判を試み、その上で組合員大衆に新たな決意を示していたならば、産別会議の凋落はなかったと思います。

産別会議の組織は、昭和21年8月の結成大会の時点で総同盟の2倍の163万人でした。それが自己批判大会を経て、23年11月の第4回大会では125万人、翌24年11月には77万人となりました。産別会議の時代は終わったのです。産別会議は、朝鮮戦争が始まった昭和25年6月に8単産32万人となり、日本労働運動のリーダーシップを総評に譲ったわけです。

（つづく）